前回までのあらすじ

流遠（るとお）やみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。
今年の夏、ひょんな事から知り合った高校生・橘（たちばな）アサトに片想い中。

謎の少女・ツバキと出会い、彼女を救うために、やみひめは〈機獣（きじゅう）少女〉となった。
危機を脱したものの、事態は収拾していない。そこで、やみひめはツバキに協力を申し出る。
やみひめはツバキを家に招き、束の間の時を共に過ごし、彼女の人柄を好ましく思った。
そして、ツバキから敵である〈カタストロ〉の存在と、〈機獣少女〉の成り立ちを聞かされる。
その結果、やみひめは改めて、ツバキに協力すると言った。〈カタストロ〉の危険性もあるが、それ以上にツバキの助けになりたいと思ったから。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX

「――〈拘束（リストレイン）〉」

少女の言葉が紡（つむ）がれると、彼女の身に纏（まと）っていた衣装が変化した。黒い和服とミニスカートを組み合わせたそれは、いわゆる『魔法少女』と呼ばれる変身ヒロインの類（たぐい）を思わせる。

しかし、それは単なる仮装（コスプレ）ではない。基（もと）となる衣装を分解し、再構築した戦装束――〈機獣少女〉が戦うためのＭＢジャケットである。動きやすいように布面積は多くないが、肌が露出している部分にも不可視の防護膜が展開しているため、並の攻撃は受け付けないだけの防御力を誇る鎧だ。

変わったのは衣装だけではない。少女の頭部には狼のような毛並みの良い耳が、腰の下部分には同じくふさふさの尻尾が生えていた。

「……やっぱり、これは生えるんだね」

少女が、人間であればありえない器官の存在を指して言った。

少女の名前は流遠（るとお）やみひめ。

普通の小学六年生の女の子。

身長・体格は共に平均値。長い黒髪をポニーテールにしており、琥珀（アンバー）のような橙色（だいだい）の瞳は少し吊（つ）り目がちだが、攻撃的な印象はない。普段は明るい表情が多いが、今は自分の状態に少々困惑気味だ。

「ふふ。とても可愛らしいですよ、やみひめさん」

やみひめに対してそう言うのは、彼女と同じ歳頃の少女だ。

ツバキ・タカチホ。

やみひめより一つ歳下の小学五年生。

身長はやみひめとほぼ同じだが、その豊かな胸は明らかに小学生を逸脱していた。普段は服装で誤魔化しているが、私服ではないため、そういうコーディネートが出来ないのだ。

セミロングの黒髪を左側で括（くく）ったサイドポニーにしており、蒼玉（サファイア）のような青い瞳は穏やかだ。澄まし顔が嫌味にならないくらい似合っており、やみひめとは対照的な落ち着いた雰囲気を漂わせている。

「だってコスプレみたいで……恥ずかしいよ。〈機獣少女〉に変身した時、ツバキは生えてなかったよね？」

以前に見たツバキの〈機獣少女〉姿を指してやみひめが言った。その際にツバキは、今のやみひめと同じ衣装だった。色は赤だったが、それ以外は同じだったはずだ。

「『変身』……ですか。なるほど、確かに昨夜観たＤＶＤでも、主人公がそう言っていましたね」

やみひめの言葉に引っ掛かったツバキが、自分を納得させるように口にした。昨夜、ツバキはやみひめと共に、彼女が持っていた変身ヒーロー番組のＤＶＤを鑑賞していた。本来であれば〈機獣少女〉がＭＢジャケットを纏うのは『装着』と呼ぶ。しかし、やみひめのような嗜好を持つ人間にとっては『変身』と言う方が馴染むのだろう。

「やみひめさん、〈機獣少女〉に変身した時、自分の中身が書き換わったような感覚がありませんか？」

「え？　うん、確かに……」

ツバキの質問に、やみひめは戸惑いつつも答えた。

「実際に書き換わっているんです。機獣の力を――人が人のまま、人ならざる力を使う訳ですから、当然、どこかに変調をきたします。その耳と尻尾は、いわゆる副作用なんです」

「副作用……？」

「はい。変身の際に唱える起動言語（スターティング・ヴォイス）、あれは言葉通り、自らを『拘束』するための戒めであり、自己暗示なんです。機獣の力に呑まれず、人である事を忘れないための」

「……そっか。あれって、そういう意味なんだ」

ツバキの説明を聞き、やみひめの表情が不安なものになる。

「でも、ツバキにはその……副作用？　みたいなのはなかったと思うけど」

「やみひめさんのように外見に現われる場合もあれば、性格面に影響が出る場合もあります。私の場合は後者になります」

「性格面……あ」

「はい。私の場合、〈機獣少女〉になると性格が機械的になるというか、感情の起伏が極端になくなるみたいなんです」

少し困ったような顔をしてツバキはそう言った。

『――以前、何かのインタビューを〈機獣少女〉の姿で受けた際、イメージが崩れるという理由でＮＧになった事があったな』

やみひめともツバキとも違う、第三者の声が響いた。スピーカーを通したような機械音声（マシン・ヴォイス）の主は、やみひめが握っている剣状の武器〈カグツチ〉だ。〈機獣少女〉の武器であるＭＢデバイスで、普段は待機状態である黒い勾玉（まがたま）の姿をしている。時代がかった女性の声で話すため、やみひめは当初、『さん』付けで呼んでいたが、本人――意思があるなら、そう言うべきだろう――の意向もあり、今では〈カグツチ〉と呼んでいる。

『やみひめよ、心配は無用だ。ＭＢジャケットを解除すれば、元に戻るのだからな。其方（そなた）は存分に私の性能（ちから）を振るえばよい』

「そっか。――うん、判った。ありがとう、〈カグツチ〉」

不安を解消するために〈カグツチ〉が気遣ってくれたのが嬉しくて、やみひめは感謝の言葉を告げた

『礼など不要だ。助けられたのはツバキだけではない、私もだからな』

「それでも、ありがとう」

『だから、礼など不要だと言うに……』

やみひめの邪気のない態度に、〈カグツチ〉は居心地悪そうに言葉を濁した。

本来のパートナーであるツバキが、その様子を見て微笑する。

「ふふ。〈カグツチ〉は意外と照れ屋ですよね」

『ふん。何とでも言うがよい』

ツバキと〈カグツチ〉の間にもパートナーとしての絆があるのだろう。二人のやり取りを聞いていると、信頼のようなものが感じられる。

やみひめがそんな事を考えていると――

――こんこん。

やみひめの部屋のドアをノックする音がした。何の気なしに、やみひめが返事をすると、開けていいと判断したのか、母親が扉を開いた。

「……。えっと、ツバキちゃん、しばらく滞在するのよね？　やみひめの服だとサイズが合わないから、明日にでも街で買ってらっしゃい」

「うん、判った」

「でも、お母さんとお父さんは明日は用があるから、一緒に行けないんだけど」

「そうなの？　うーん……あ、じゃあアサトに来てもらおうかな！？」

「ご迷惑じゃない？」

「電話して訊(き)いてみる。駄目だったら、二人で行くよ」

そんなやり取りをいくつかして、母親は部屋を出て行った。

「アサトの携帯電話の番号、どこに置いたっけ……どうしたの、ツバキ？」

携帯番号を記録したメモの場所を思い出していると、ツバキが生温かい目でやみひめを見ていた。

「やみひめさんのお母様は、ずいぶん理解がある方なんですね」

「え？　……あっ！？」

ツバキに言われて、やみひめは気付いた。自分が今、どんな格好をしているのか。

黒い和服とミニスカートを組み合わせた、まるで魔法少女のような衣装。狼の耳と尻尾

を付け、極めつけに右手に持ったメカニカルなデザインの剣。

恐らく、母親はこう思っただろう――娘が変身ヒロインごっこに興じていると。

「ちょ、え、あ……うわああああああああああああああああああああああああ――ッ!?」

閑静な土曜の午後に、少女の苦悩の叫びが木霊(こだま)する。

流遠やみひめ、十二歳。

多分に多感なお歳頃である。

第四話

『機獣少女達の休日』

命のやり取りをした金曜日。ツバキから〈機獣少女〉の話を聞いて、お母さんに〈機獣少女〉の姿を見られた土曜日。そして、今日は日曜日で、ツバキと一緒に街に来ている。目的はツバキの服や、生活用品なんかを買うため。今はアサトとの待ち合わせ中なんだけど……。

「……はあ」

思わず溜息（ためいき）が出てしまうのは許してほしい。きっと私は、いい歳して変身ヒロインごっこをやってる痛い子だと思われてる。お母さんは何も言わないし、そんな素振りは見せないけど……。

「ああっ！　私の馬鹿！　うかつ者！」

もう何度目か自分でも判らないけど、そんな言葉が出てしまう。

「やみひめさん、気を落とさないでください。お母様が誤解してくださったからこそ、〈機獣少女〉の事がバレずに済んだのですから」

「その代わりに私の尊厳が失われたけどね……」

ツバキが慰めてくれるけど、私の自尊心はそんな事では元に戻らない。ツバキの言ってる事は正しいし、前向きに考えた方がいいのは判ってるけど――私はそんなに大人じゃない。

「ねえ、人が近寄らなくなるとか、空間を隔離するとか、そういう結界みたいなのを張る機能とかないの？」

「そういうのはないですね。〈機獣少女〉の存在は秘匿（ひとく）されていませんから、ゼヘナでは必要ないんです」

私の訴えに、ツバキは申し訳なさそうに言った。そうだ、ツバキの住んでいる惑星ゼヘナでは、〈機獣少女〉は当たり前に認識されている存在だから、隠さなくていいんだ。でも、ここは地球で、変身ヒロインなんて現実にはいない。変身した私だけなら『痛いコスプレ少女』で済むけど――それも嫌だけど――〈カタストロ〉と戦ってるところを目撃されたら問題になる。顔を見られたり、写真や動画に撮られたりしたら、私だってバレるだろうし。

「じゃあさ、〈カタストロ〉と戦う時は、前みたいに〈カグツチ〉に代わってもらうしかないと思う。私だって知られたら、私の尊厳以前に、大騒ぎになっちゃうと思うから……」

「それは……」

『――それが賢明かもしれぬな』

難色を示すツバキの言葉を遮（さえぎ）って、〈カグツチ〉の機械音声（マシン・ヴォイス）が割り込んだ。当然、今は待機状態の黒い勾玉（まがたま）の姿でツバキの首にネックレスみたいにぶら下がっている。

『やみひめはあくまで協力者だ。この世界での生活がある』

「私が懸念しているのは、〈カグツチ〉――貴女(あなた)がやみひめさんの身体を使う事です。〈機獣少女〉が戦闘を続けられなくなった際の緊急措置、それを恒常的に行えば、どんな影響が出るか判りません」

『では、善意の協力者であるやみひめに、今の生活を捨てる覚悟を持てと?』

「そうは言っていません。ただ、他の方法を模索すべきではないかと――」

『ならば妙案を述べてみよ』

「それは……」

ツバキが言葉に詰まる。割って入るべきなんだろうけど、口論になってる原因は私で、私だって妙案なんてない。

ど、どうしよう……。

少し険悪になってる空気を感じながら、私があたふたしていると――

「――やみ子、来たぞ」

不機嫌そうな声が私の耳に届いた。私の事を『やみ子』なんて呼ぶのは一人しかいない。

「アサト！　よかった、来てくれて!!」

私は声の主の男の子に、思わず飛びついていた。それは普段から抱いている願望でもあるけど、今は本当にこうしたい気分でもあったから、自制なんて利かなかった。

「……くっつくな、鬱陶しい。俺を犯罪者にしたくないなら、さっさと離れろ。交番が近い」

「なんでアサトが犯罪者になるの?」

いつも以上に気怠(けだる)い口調のアサトの言葉に、私は疑問符を浮かべた。

「小学生とくっついてるだけで『事案が発生』って言われるご時世なんだよ。判ったら離れろ。それがお互いのためだ」

「むぅ……判った」

アサトの言い分に仕方なく納得する。私の恋は前途多難みたいだ。

「まったく、何が悲しくて休日に小学生に呼び出されにゃならんのだ」

「もう！　さっきから小学生小学生って、アサトだってまだ高校生でしょ!?　何が不満なの!?」

「不満しかない。小学生と高校生の間には、深くて長い川があるんだよ」

アサトがよく判らない事を言ってる。演歌の歌詞かな?

「でも、来てくれたって事は暇だったんでしょ？」
「暇じゃない。今日は可愛い彼女と一日中ごろごろする予定だったのに」
……今、ありえない言葉がアサトの口から出た気がする。
「エ、アサト、ナニイッテルノ？　ワタシ、ナニモキコエナカッタヨ」
「目をそらすな。現実を受け止めろ」
「アサト、彼女なんかいるの！？　私、聞いてない！」
「超可愛いぞ。所構わず俺にすり寄って甘えてくる。頭や腹を撫でてやると、良い声で鳴く」
そんな事を言って携帯電話を操作すると、私に「画像だ」と言って画面を見せてきた。見たくない。けど、確かめないと。場合によっては修羅場も覚悟しないと。そう決意して、私は携帯電話の画面の『彼女』を見た。
「可愛いだろ？」
アサトの言葉通り、画面の『彼女』はすごく可愛かった。私も頭やお腹を撫でたくなるくらいに。しかも、『彼女』は全裸で、あられもないポーズをとっていた。大胆に仰向けで、すべてをさらけ出していた。
「――って、猫じゃない！」
そう。画面の『彼女』は猫だった。種類はよく見かける日本猫。ほとんど茶色で、瞳は黄色い。彼女というくらいだから雌（めす）なんだろうけど。
「もう！　びっくりしたよ！　本当に彼女だったらどうしょうって、本気で考えたんだからね！？」
でも、そっか。この子、アサトに飼われてるんだ。一緒に寝たりしてるのかな。それはそれでうらやましいな……。
「……なんだ、物欲しそうな顔して。お前は飼わないからな。それこそ捕まる」
「べ、別にそんなこと言ってないでしょ！？　アサトの馬鹿！　変態！」
でも、アサトの部屋に監禁されて、首輪とか付けられちゃったら……。
あらぬ妄想が広がっていく。私、そういう背徳的なのに興味があるのかな……？
「なんで赤くなる。冗談に決まってるだろ、このマセガキが。それより――」
「？」
「あの子、お前の連れじゃないのか？」
アサトの目線の先にいるのはツバキだ。すぐそこだから、アサトとの会話は全部聞かれてたはず。アサトとは一昨日（おととい）の放課後に逢（あ）ったけど、その直後の出来事が大きすぎて、再会が懐かしかったから、ツバキの存在を忘れてしまっていた。

「ご、ごめんねツバキ……今日はツバキの買い物のために来たのに、放っておいて」
「気にしてませんよ。私と接している時とは違うやみひめさんが見られて、新鮮でした」
ツバキはそう言って微笑んだ。そんな風に言われると、ちょっと恥ずかしい。
「紹介するね。この人が橘（たちばな）アサト。高校三年生。この子は高千穂（たかちほ）ツバキ。私の親戚で小学五年生」
そう言って、二人に簡単な紹介をした。ツバキの名前は日本読みにして、漢字は九州の同名の土地の字を当てた。親戚っていうのは嘘だけど、その設定でいく事はツバキと相談済み。
「初めまして、橘さん。お会い出来て嬉しいです。本日は来てくださって、ありがとうございます」
「あ、ああ……よろしく」
ツバキは予想通り動じない。誰に対しても落ち着いてるんだな。対して、アサトは珍しく――というか、初めて動揺している姿を見た。挙動不審な訳じゃないし、普段のアサトを知らなければ気付かないかもしれないけど、私はアサトがいつもと少し違うと感じた。
「どうしたの？」
私はアサトを引っ張って、ツバキから会話が聞こえない距離に移動して訊（たず）ねた。
「ずいぶんと落ち着いてるというか、しっかりした子だな」
「あ、うん……ちょっと訳ありというか」
「しかも規格外だ。クラウもそうだが、お前の友達はあんなんばっかりか？」
「規格外？」
くらうは私の親友でクラスメイトの女の子で、アサトとは夏祭りで面識がある。けど、『規格外』って……ああ、そういう事か。
「アサト、もしかしてツバキの胸の事言ってる？」
「ああ。ロリ巨乳っていうのは実在したんだな……」
アサトは何の躊躇もなくそう答えた。男の子は胸が大きいのが好きって言うけど、アサトも例外じゃなかったみたい。それ自体は仕方ない事かもしれないけど、ロリ巨乳って……。
「アサト、胸の事は禁句だからね。ツバキ、気にしてるんだから」
「言えるか。セクハラ以前に、それこそ『事案』だ。しかし……けしからんな」
ちらとアサトがツバキの方を見て言った。『どこ』がどう『けしからん』のかは言及しないけど……なんだか面白くない。
「とにかく、アサトは今日は荷物持ち！　判った？」

「判ってる。その代わり、昼食は奢(おご)れよ？」

そう。今日のアサトは荷物持ち。アサトと休日に逢(あ)うのは初めてだからデートって言いたいけど、今日はツバキも一緒だから、あまり浮かれていられない。ツバキのエスコートもちゃんとやらなきゃ。

「ごめんね、ツバキ。ちょっとアサトに色々言い含めてきたから。それじゃあ、行こう」

「はい。不慣れなので、よろしくお願いしますね」

ツバキは本当にしおらしいというか、助けてあげたくなる雰囲気がある。それは言葉遣いや仕草も、大きな要素なのかもしれない。

そんな事を思っていると、通行人と軽くぶつかってツバキがよろけた。すぐに支えようとしたけど、後ろにいたアサトの方が反応が速かったみたいで、ツバキを抱きとめるみたいな格好になっていた。

「あ……ありがとうございます、橘さん」

アサトに支えられたツバキの頬が少し赤い……もしかして照れてる？

「いや。人多いから、気を付けてな」

アサトはいつも通りのポーカーフェイスに見えるけど……気のせいかな、私と接する時より優しい顔に見える。

……なんだか面白くない。

「ツバキ、行こう！」

私はツバキの手を取って少し急ぎ足になった。

「おい。急ぐと危ないぞ」

「判ってるもん！　アサトの馬鹿！　ダメ人間！」

慌ててついてくるアサトに、私は理不尽な事を言ってしまう。ちょっとだけ自己嫌悪。

でも、嫌だったんだ。アサトがツバキに……ううん、私以外の女の子を見てるのが。

●　●　●

待ち合わせ場所の駅から、目的地のデパートに移動して、まずは衣料品の店が集中しているフロアに移動した。

「ツバキは普段、どんなお店で服を買ってるの？」

もやもやした気持ちはあるけど、むくれてるとツバキに悪いので、私は雑談をして気分を切り替える事にした。

「こういうデパートに入っているような大衆向けのお店です。特にこだわりはありません

し、高級ブランド店やお洒落な雰囲気のお店は苦手で」

「私も。一度そういうお店に入った事があるけど、店員さんに話しかけられて焦っちゃった」

よかった。ツバキは私と同じタイプみたい。じゃあ、これから行くお店で大丈夫かな。

「アサトは？　服ってどうしてるの？」

私達の少し後ろを、ついてくるみたいに歩いてる、今日の荷物持ちことアサトに訊ねた。

「俺も似たようなもんだな。年に二、三回、同じ店で適当なのを選んでる」

「ウニクロ？」

私がアサトの利用している店に見当を付けて訊くと、「そうだ」という答えが返ってきた。

『ウニクロ』は下着や上着も扱っている有名な大衆向けブランドで、お父さんも衣料品はほとんどそこで買ってる。口ぶりからいって、アサトもファッションに興味がなくて、安くて無難なものを選ぶタイプみたい。

「年に二、三回しか買わないの？」

「この歳になると身長も体型も急には変わらない。この服も二年くらい着てるな」

私の疑問に、アサトは着ている黒い上下を指してそう答えた。なんの装飾もない黒い長袖シャツとチノパンは、地味だけど似合ってると思う。

そういえば、アサトの私服姿を見るのは久しぶりだ。平日はアサトも学校帰りだから、制服だし。あ、ちょっとデートっぽくてドキドキしてきたかも。

ちらとアサトの右腕を見る。ショルダートートを背中に回しているから、何も持っていない手ぶら状態。私は夏祭りの時にしたみたいに、思いきってアサトの腕に自分の腕を絡ませた。

「えへへ」

照れ隠しに笑って見せてから、アサトを見上げる。少しぎょっとした顔をしてるけど、嫌がってはない……と思う。

「……くっつくなよ。お前は俺を豚箱行きにしたいのか？」

アサトがジトッとした視線を向けてくる。さっき言ってた『事案』の心配をしてるのかな。

「大丈夫だよ。ちゃんと同意の上だから」

「同意があっても法的にアウトなんだよ。だいたい、俺がいつ同意した？」

「言葉にしなくても判ってるから」

「もじもじするな、わざとらしい。さっさと離れろ、歩きにくい」

「でも、はぐれると困るし。迷子の呼び出しをされるのは恥ずかしいでしょ？」

「なんで俺の方が呼び出される側になってるんだ」
そんな舌戦を繰り広げていると――
「――あっ」
と、アサトを挟んで反対側を歩いていたツバキが短く声を上げた。
何かにぶつかったのか、アサトの方によろけて――私と同じような状態、つまりアサトの左腕に抱きつくような格好になっていた。
「すみません、橘さん。ちょっと、よろけてしまいました」
「あ、ああ……大丈夫か？　貧血とかじゃないのか？」
「いえ。少し足場が悪かったみたいです」
「ならいいけど……なんだ、やみ子。その『今なら人も殺せそう』みたいな顔は」
私の視線に気付いたアサトが、うんざりしたような顔で言った。
「そんな怖い顔してないもん。ただ、私とツバキで、ずいぶん態度が違うんだね」
私の不満に満ちた言葉に、アサトが少しだけばつが悪そうな顔をする。自覚はあるみたい。
「……そんなことねえよ」
「あるよ！　今、間があったし！」
「なんで、そんなに怒ってるんだよ？」
「怒ってないもん！」
そう。私は怒ってない。ただ不機嫌なだけ。だって、アサトがツバキには優しいから。
私は邪険にするのに……。
「ツバキに抱きつかれてデレデレして！　そんなに胸が大きいのがいいの！？　馬鹿！　えっち！」
言ってしまってから、はっとした。胸の事を気にしてるのは誰でもなく、ツバキ本人だという事に。
恐る恐るツバキの方を見ると、アサトから離れて、俯（うつむ）きがちにもじもじしていた。頬（ほお）がわずかに赤い。
途端に私の中に罪悪感がこみ上げてくる。
「あの、ツバキ……ごめん！」
ツバキに近付いて、私は頭を下げた。胸の事をコンプレックスに感じているのは、ちゃんと判っていたはずなのに。
「いいですよ。怒ってませんから、もう顔を上げてください」
ツバキの声は優しい。本当に怒ってないんだと思う。むしろ、困っているように聞こえ

る。
「でも、ツバキが気にしてるの知ってたのに、無神経な事言ったから……本当にごめんね」
「いいですよ。やみひめさんに悪意のないのは判ってますから。恥ずかしいだけで、傷付いたりはしてませんよ？」
「本当に……？」
「はい、本当です」
そう言ってツバキは微笑を浮かべてくれた。私の方が気を遣われてしまった気がする。
「やみ子、お前の方が妹みたいだぞ」
と、アサトが空気の読めない発言をした。せっかく綺麗にまとまる流れだったのに。
確かにツバキの方が歳上みたいだけど……。
「アサト、うるさい」
「駄目ですよ、橘さん。余計な事を言う男性は嫌われますよ？」
私達の非難の言葉を受けてアサトが不満そうな顔をする。
「……俺が悪いのか？」

●
●
●

一悶着あったものの、私達は目的の店に着いて、さっそくツバキの服を見る事にした。有名なブランド店とかじゃないけど、手頃な値段で良いものが揃ってるから、私はいつも服はここで選んでいる。
「ツバキはどんなのがいい？」
「ゆったりした感じで、おとなしめのデザインであれば、特に好みはありません」
「ミニスカートとかは嫌い？」
「あまり好きではありません。落ち着かないので」
確かに、ツバキには派手なのより、落ち着いた雰囲気の方が似合いそう。〈機獣少女〉の時のミニスカート姿も似合ってたけど。
「あのデザインは初期設定（プリセット）です。個人の好みに合わせて変更（カスタマイズ）は可能ですが、性能は特に変わりませんから、そのまま使っているんです」
「そうなんだ。〈カグツチ〉に代わった時、スカートが袴になってたのは、そういう事？」
（――そうだ。あの外見でミニスカートは問題があるしな）
私の疑問に、待機状態でツバキの首にネックレスみたいに下がっている〈カグツチ〉が答えてくれた。念話なので直接、心に届く。

「確かに、大人であのミニスカートはちょっとね」
私はその格好を想像しようとして、やめた。イケナイ雰囲気になるのは目に見えてたから。
ちなみに、アサトは少し離れた場所で所在なさげにしていた。この店は女性ものしかないから、男の子が一人でいると悪目立ちする。
あ、目が合った。『一人にするな』って顔してる。
さっきの事があったから、ちょっと意地悪するつもりだったけど……可哀そうになってきた。
だから――
「お兄ちゃん！　ほら、早く来て」
仕方がないので、『妹の付き添いで来た兄』という判りやすい状況にしてあげた。
けど、アサトは引きつったような明らかに無理して笑ってます――みたいな顔をしてる。
「どうしたの、お兄ちゃん？」
「やみ子……お前、わざとやってるだろ？」
「えー？　やみ子、わかんなーい。どういうこと、お兄ちゃん？」
私が『お兄ちゃん』と言う度、アサトの表情が引きつる。
うん。面白い。
「そうですよ。ちゃんと選んでください――兄さん？」
あ、ツバキも乗ってきた。真面目だと思ってたけど、意外とこういうのも好きなのかも。
じゃあ、さっきの――よろけてアサトの腕に抱き付いたのも、わざとだったのかな？
「兄さんは可愛いのと大人っぽいの、どちらが好きですか？」
……すごい。ツバキの『兄さん』は板についてるというか、わざとらしさがない。本当にアサトと兄妹に見える。
「……ツバキ、勘弁してくれ」
「どうしたんです？　体調でも悪いんですか――兄さん」
確実にアサトの精神ポイントが削られてる。ツバキはいつも通りの澄まし顔で、悪意なんてまったく感じないのが逆に怖い。
結局、アサトは二時間くらいで三桁に届くくらいの『お兄ちゃん・兄さん』口撃（こうげき）を受け続けた。

●
●
●

第一目的であるツバキの衣料品を買った私達は、少し遅めの昼食を摂るためにファミレスに入っていた。注文を済ませて、アサトはお手洗いで席を外している。

あの後、下着コーナーに移動してからも色々とあったんだけど、アサトの自尊心のために触れないことにする。

「ちょっと疲れたね」

「そうですね。けど、新鮮な経験です。こんな風に誰かと買い物をするのは初めてなので」

橘さんには少し悪い事をしてしまいましたけど、とツバキは少しだけ申し訳なさそうな顔をする。アサトとの兄妹設定の事だ。

「あはは。そうだね」

「けど、これも新鮮でした。私は一人っ子なので」

「そっか。私は……ちょっとだけ複雑かな」

「そうなんですか？」

ツバキが意外そうな顔をした。

「さっきの店の店員さんがね、アサトに『可愛い妹さん達ですね』って言ってたのが聞こえて、やっぱり、周りからはそう見えるんだなって」

「それは……」

「うん。仕方ないのは判ってるんだ。私は小学生で、明らかにアサトより小さいから。でも……それでもね、私は妹じゃなくて、アサトの隣に立ちたいんだ。それに気付いちゃった」

まだ『リハビリ』という口実の逢瀬が始まったばかりの頃は、『お兄ちゃん』って呼ばせてくれないのが不満だった。けど、今は私の方が呼びたくなくなってる。私は妹じゃ嫌だから。

「私、自分で思ってる以上にアサトの事が好きみたい――」

口に出してみて、自分の気持ちが確信に変わった気がした。

「ご、ごめんね！　急にこんな……何言ってるんだろ、恥ずかしい事言ってるよね」

「いいえ。素敵な事だと思います。そう思える、そんな風に想う相手がいるのは」

ツバキは優しい顔でそう言ってくれた。からかわれたりはしないと判ってたけど、ツバキはやっぱり大人だな。

「ありがとう。ツバキは優しいね」

「ええ。いつも優しいツバキさんですよ」

冗談っぽく言ってるけど、そんな風に言えるツバキは、私よりお姉さんっぽい。ちょっと悔しいけど。

話題がなんでもない内容に変わった頃、アサトがお手洗いから戻ってきた。
「おかえり。ずいぶん、ゆっくりだったね？」
「……一人になりたかったんだよ」
あ、ちょっと本気の声音（トーン）だ。本当にさっきの店で消耗したのかもしれない。
「すみません、橘さん。本当に兄が出来たみたいで、つい、はしゃいでしまいました」
「……そうか。君が楽しかったんなら、いいんじゃないか」
ツバキの申し訳なさそうな言葉が伝わったのか、ぶっきらぼうな言い方だけど、アサトは嫌な顔はしていない。
「私も、ごめんね。もう『お兄ちゃん』って呼ばないから」
そう――『妹』じゃ嫌だから。
後ろからついていくんじゃなくて、隣を歩きたいから。
「……そうしてくれ」
私の決意が伝わったのかは判らないけど、アサトは少しだけ目を細めて言った。
今は兄妹にしか見えなくても、すぐにアサトの隣に並んでもおかしくない、大人の女になるから。
〈カグツチ〉の勘が本当なら、胸が大きくて、それに見合う美人さんになるはずだから。
だから――
「もうちょっとだけ、待っててね」
アサトにだけ聞こえるように、ぽつりと伝えた。
なんの事を言っているのか判らないアサトは、頭に『？』を浮かべていた。もしかしたら、ちゃんとは聞こえていなかったかもしれないけど。それでもいい。
だから私は「なんでもない」と言って笑った。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第四話をお届け致します。

今回は息抜き回です。第三話もまったりした話ではあるんですが、ほとんど説明をしていたので。

本当はもっと『小学生に振り回されるアサト（18）』を書きたかったんですが、思いのほかアバンが長くなった事、本編もちょうどいい塩梅（あんばい）になった事で、この後に予定していたツバキの日用品を買うシーン、そこでアサトがやみ子にプレゼントを買うシーンはやめました。蛇足な気がしたので。下着コーナーのくだりが割愛されたのも同じくです。

余談ですが、アサトの『彼女』こと、茶毛で黄色い瞳の猫の名前は『ベアトリーチェ』です。

とりあえず、感覚的には三分の一が終わったくらいです。やみ子は受け入れていただけているでしょうか？　可愛いと思ってもらえているでしょうか？　多分に不安ですが、僕は可愛いと思ってます。当然ですが。

ここからは、ちゃんと変身ヒロインものらしく、バトル展開もやります。プロローグ以来、出番のなかった『あの子』も再登場します（サイドストーリーには出てますが）。

なんとか順調に更新出来ているので、このペースで完結まで持っていきたい所存です。その先にあるものを目指して……。

良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

ロリの可愛さは愛玩動物に通じるものがあると思います。けして邪（よこしま）な目で見てはいけません。娘を見守る父親のような気持ちで愛でましょう。

ロリを愛する心――それは父性なのですから。

その精神を忘れてしまった変態紳士は、ただの変態です。
でもまあ……邪な目で見ちゃう事もありますけどね！
だって、ダメ人間だもの。

ロリ好きにも優しい『ゾイやみ』を今後もよろしくお願いします。

２０１４／12／12　流遠亜沙

アンケートに答える
『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る